
恋愛模様 共通編

土屋 ハヤト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛模様 共通編

【Zマーク】

Z0324Y

【作者名】

土屋 ハヤト

【あらすじ】

恋愛つてのがよく分からない。そんな高校生『上村伊吹』を中心¹に回り始めた儚くて、ドキドキで、温かい20の恋の物語。

プロローグ（前書き）

初めまして土屋ハヤトです。

この小説を読むつとめて貰いありがとうございました。

この小説は私が初めて書くラブコメなので色々問題もあると思いま
すが温かい目で見て貰つたら幸いです。

プロローグ

ジュリアに出会って俺は人のつながりを
式季に出会って守る難しさを
遊香里に出会って出会いと別れを
奏に出会って一歩踏み出す勇気を
悟先生に出会って人の温かさを
冷に出会って失っても残り続ける心を
そよに出会って自分の価値を
華乃に出会って過去との決別を
七海に出会って運命にあらがう強さを
ふあみ先輩に出会って・・・持病の片頭痛が悪化した
めいちゃんに出会ってあいつと向き合えた
かもめさんに出会って信じ続ける強さを
初に出会って家族を

愛佳に出会つて受け入れる意味を

美崎に出会つてつまらない世界を

くいなに出会つて生きたいと

ぽえみに出会つて彼女の脆さを

舞に出会つて心の弱さを

閑先輩に出会つて過去を乗り越える強さを

桜美に出会つて

色んな人に出会い恋をして

僕の周りを彩る模様は

無数の広がりを見せて行く

これは小さく大きな恋の物語

恋愛模様

春風のプロローグ？（前書き）

それでは本編スタートです。

春風のプロローグ？

4月7日（木）

京矢「合コンがしたい！！」

突然親友が合コンをしたいなどと口走り始めた。

伊吹「すれば、俺抜きで」

俺は流した。

京矢「なあ、なあー！絡もうぜ合コンに行こうぜーー！」

伊吹「別にいいよ。興味ないし」

京矢「興味ないだとー？それでもお前日本男児かー？あの女を8股にかけて傍若無人の限りをつくしていたお前は何処に行つてしまつたんだー」

伊吹「俺の知ってる日本男児はもっと仁義を大事にしてた。あと、ありもしないことを事実みたいに話すのは止めてくれ。俺がそう見られるから」

事実、登校途中の学生たちが俺たちを変な目で見ていく。周知の目
が痛い。

伊吹「つていうかさ、お前彼女いなかつたっけ？」

京矢「うにゃ？」

俺の親友、城島京矢は俗に「うイケメン」と呼ばれる部類だ。その上リーダーシップがあつて学校では生徒会会計。バイトではバイトリーダー。まさに俺とは違つて出来た人間だ。

京矢「実は振られちゃって・・・」

伊吹「またか」

ただこいつの悪こというのは恋より友情などと一緒にしてしまうところだ。

京矢「だから」を本当にレディーに出售つんだ

こいつは口では合コン合コン言つてるが、本当は自分のことを分かつてくれる女性を見つけたいんだと思つ。

京矢「お前も行こうぜ伊吹」

伊吹「俺は止めとくよ」

京矢「まったく。ホントお前つて女の子関係で浮ついた話がないよな」

俺には女の子との浮ついた話しがない。別に男が好きだったり、女の子の友達が少ない訳じゃない。

伊吹「分からないんだよ。恋とか恋愛とかそういうの

京矢「もつたいねえな。素材はいいのに」

伊吹「それでもお前のほうがカッコいいから霞んで見えるんだよ」

京矢「きっとお前の」とを分かつてくれる女の子に出会えたはずだ」

京矢が俺の肩をポンと叩いた。

伊吹「だといいんだけどな」

新学期のクラス発表を見に校内の掲示板を見に来たがかなりの同級生がそこにはいた。

京矢「さて俺らのクラスは何組かな」

伊吹「今年くらいお前と別のクラスにならないかな」

京矢「つれないな伊吹」

？？「そうだよ。2人はまた同じクラスだよ。2人はきっと運命の赤い糸で繋がってるんだね。」「

伊吹・京矢「繫がつてねえよーー！」

俺たちを茶化した茶髪のショートカットの女の子。

? ? 「今学期も宜しく…」

「この子の名前は『井國舞』。去年からの同級生で俺や京矢と何かと意氣があつてつるみ始めた友達だ。

舞「春休みも終わったのに元気だね お一人さん」

性格派明るくてクラスのムードメーカー。

京矢「舞ちゃんは春休みは部活だったのか?」

舞「うん。走ったよ~超走ったよ

舞は陸上部のエースで、この地域でも指折りの選手らしい。

舞「2人はバイト?」

伊吹「ああ」

京矢「右に同じく」

舞「2人も、大変だね。つて、こんな感じで立ち話もあれだから
体育館に行こ」

京矢「賛成」

（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）

体育館での長い話しば終り俺は夢の世界から目覚めていた。

で、今は新しい教室にやって来たのです。

？？「えーと、個人の紹介は後にしますは私の紹介だ

教壇に俺の見知った人が立つた。

悟「私の名前は達神悟。去年はEクラスを持っていたが、今年からはこのEクラスを担当することになった。担当は国語で生徒会の顧問もやっている」

この女性はさつきの説明もあつた通り達神悟先生。去年は俺たちの担任をしていていた。

悟「私から言いたいことは一つ。面倒ことは起こすなよ。私が大変だ。後、もう一つ、自分で出来る」とは自分でしろー！以上だ

「つじやない…やつぱつ」の人適当だ。

悟「じゃあ、終り」

終わった！？

春風のプロローグ？（後書き）

・次回予告

？？「始まつた新学期。伊吹の周りの変わらない人たち。

次回『春風のプロローグ？

私かい？まだ、内緒だよ？』

春風のプロローグ？（前書き）

短いです。

春風のプロローグ？

4月7日（木）

舞「起つきう————！」

伊吹「ふつー？」

突然耳元で声を出されて俺は妙な声を上げてしまった。

舞「新学期早々に寝るなんて学生の本分から逸脱してると…」

伊吹「俺寝てたのか」

悟先生の話はあの後、先生の愚痴に変わりバイトで疲れていた俺はいつの間にか寝てしまっていた。

? ? 「伊吹くんが授業中に寝てるのって珍しいよね」

俺が目をこすると舞の隣にもう一人の女の子が立っていた。

七海「おはよう伊吹くん」

こいつは『園原七海』。高校に入つてからの友達で俺たち仲良しがループの1人。性格は優しくて、俺たちのフォローやくと言つてもいい。

伊吹「そう言えばお前も同じクラスか」

七海「酷い。忘れてたの？」

七海が手で顔を覆う。

伊吹「違う、違うー！俺、クラス名簿見てなかつたからーー！」

俺はとりあえず弁解をした。

七海「・・・ふふふ。冗談だよ」

伊吹「はあ。びっくりした」

七海「ホント？」

舞「七海ちゃんの冗談は冗談に聞こえないからね」

京矢「真に迫ってるよな」

いつの間にか京矢も来て、俺の机を囲み話が盛り上がり始めた。

京矢「そうだ、みんな放課後暇？」

今日は始業式だから学校は午前中だけだ。

舞「私は部活休みだから〇〇だよーーー！」

七海「うん。私も大丈夫」

2人は大丈夫みたいだ。俺の予定は・・・・・

伊吹「俺は7時までなら大丈夫だ」

京矢「よし、なら決まりだ。じゃあ・・・」

舞「誘いますか」

3人の目の先には一人の女の子がいた。

いや、寝てたの方が正しいか。

しかも、それを誰も気にしたりしていない。それもそもそもはずだ。何せそれが彼女なのだから。

七海「起きてぽえみ」

ぽえみ「うにゅー。あと18時間45分32秒」

伊吹「どんだけ寝る気なんだよー！」

ぽえみ「出来れば一生ー」

舞「駄目人間だ！？」

京矢「しかし、それも理想の生活だな」

七海「いい加減に起きなさい」

七海がぽえみの髪を引っ張る。

ぽえみ「ななちゃん、私が悪かったから、引っ張らないで〜」

七海「それなら起きなさい」

七海は相変わらずぽえみには厳しいみたいだ。

京矢「それじゃあ行こうぜ」

昇降口に向かう前に俺の隣で眠りにしている女の子ぽえみのことを紹介しようと思つ。

『蝶鳥穂絵美』。いつもぼわぼわしていることからみんなが『ぽえみ』と呼ばれている。寝ることが大好きで体育以外の授業で起きているのを見ると幸せになれると言うジンクスがあるくらいだ。でも、ぽえみが本当に体育で起きているのかは男子の俺は知る由もない。

ところが、ぽえみは家のクラスの委員長です。

驚いた？

春風のプロローグ？（後書き）

・次回予告

？？「放課後に遊びに行こうとした仲間たち。しかしそれを阻止する黒い影」

？？？「アタシを置いて遊びに行くなど、麺のないラーメン見たいなものだ！！」

？？？「次回『春風のプロローグ？』
『これが物語の序章』」

春風のプロローグ？

4月7日（木）

七海「で、今日は何処に行くんですか」

昇降口に着いた時、七海が京矢に今日の遊びを聞いた。

京矢「俺としてはカラオケかゲーセンが妥当だと思うんだけどな。
皆はどうちがいい？」

歌が苦手な俺はすぐに答えを決めた。

伊吹「ゲーセン！！」

俺以外「カラオケ！！」

俺の思いは盤上一致で拒否された。

伊吹「しくしく・・・・」

舞「伊吹くん泣かないで！？」

七海「そうだよ」

京矢「お前の歌が聞きたくて提案したんだからな

伊吹「鬼！！」

俺たちが昇降口を出ると、知り合いでキヨロキヨロ何かを探していた。

京矢「ジュリア。どうした」

ジュリア「城島くんにみなさん」

彼女の名前は『ジュリア・如月・ルミエール』。俺たちと同じ2年生で生徒会の副会長である。名前から分かるように何処かの国の人オタらしい。

ぽえみ「そんなに焦つてどうしたの？」

ジュリア「実は会長がいなくなっちゃって」

ぽえみ「またなんだ？」

ジュリア「もし見つけたら」

京矢「そん時は俺が連絡するわ」

ジュリア「ありがとうございます」

京矢「いいつことよ。あの人に迷惑掛けられてるのは俺やぽえみも一緒なんだからな」

うちの生徒会長はとてもいい加減な人だ。何となく、サハラ的な砂漠に行つたり、カタコンベ的な墓地に行つたりと思い立つたらすぐ行動をする人だ。だから京矢や如月さんが所属している生徒会や、ぽえみたち学級委員たちはいつも迷惑を掛けられている。

ジュリア「それにしても皆さんはお揃いで下校ですか？」

伊吹「今からみんなで……カラオケに行くんです」

ジュリア「カラオケですか。いいですね」

舞「ジュリアさんもどうですか？」

ジュリア「ありがとうございます。でも私は会長を捕獲しないといけないので」

ぼえみ「残念」

伊吹「じゃあ、会長探し頑張つてくださいね」

ジュリア「はい」

? ? ? 「・・・・ オケ・・・（ボソ）」

小さく何かが聞こえた気がした。

伊吹「何か聞こえたけど。みんなは？」

京矢「んや？ 聞こえなかつたけど。みんなは？」

舞「私は何も聞こえなかつたけど？」

七海「幽霊の声とか？」

ぽえみ「ななちやん」まだお昼~」

京矢「つてことだ。お前の考えすぎだ」

伊吹「そりだよな」

バイトで疲れてるのかな。

伊吹「氣のせいだよな」

????「んな訳あるか！！」

突然目の前から小さい女の子が飛んできて。

伊吹「ぶろふあ」

俺の腹に右蹴りがめり込んだ。

伊吹「うつうつうつ（のた打ち回^の音）」

????「まったく！アタシを置いて遊びに行くなど、麵のないラーメン見たいなものなのだ！！」

いや、それただのスープだとソレ「ミミたかつたが、腹の痛みでそんな余裕はなく、次に言葉を発したのは如月さんだった。

ジユリア「ふあみ先輩！」

ふあみ先輩「にゅ？どうしたルミルミ？もしかして今日生理の日だから機嫌悪い？」

ジュリア「違います！！」

如月さんの拳骨がふあみ先輩の小むこ頭の中心にゴシンと音を立て当たる。

ふあみ先輩「痛いぞルミル＝…カリブ海のよつな広い心のアタシもいくらなんでも怒るだーー！」

ジュリア「怒りたいのはこっちです…一体今までどこに行つてたんですか！？」

ふあみ先輩「えーとな、風になりたくてボルドワイン・ストリートを自転車で掛け降りてきた」

舞「ななみちゃん…ボルドウイングウズ・ストレートってなんだか分かる？」

違つ、舞。ほとんど違つ。

七海「えーと…ぼえみ」

この子自分じゃ分からぬからつて隣の友達に全部丸投げした…！

ぼえみ「ひにゅー坂」

「の子はこの子で一言でまとめた！？」

伊吹「世界で一番急な坂だよ」

とりあえずこれ以上話が脱線しないようにまとめた。

ふあみ先輩「最高に風だつたぜ」

空を見上げながら感慨にふけつているこの人こそ、この私立大海歌原高校第99届生徒会長の『ふあみ先輩』である。性格は見ての通り自由奔放で思い立つたらすぐ行動し、周りに迷惑ばかりをかけている。この人はまさに奇跡の体現者なのだ。

ふあみ先輩「これこれ。人を奇跡の体現者と超絶美人とか言つな」

伊吹「人の心を勝手に読まないでください。後、超絶美人なんて世界の女性に失礼ですよ」

ふあみ先輩「世界レベル！？」

ショックを受けたのかふあみ先輩はしゃがみこんでしまう。

伊吹「じやあ行こうぜみんな」

京矢「お前ふあみ先輩には容赦ないな」

この人に容赦や手加減なんて言葉は必要ない。

ふあみ先輩「ま、待て！アタシも連れてけーーふあうーー！」

ジユリア「先輩は仕事です」

如月さんに首根っこを持つて校舎の方に持つていかれてる。

ジユリア「では、みなさん。また

伊吹「また」

京矢「またな

舞「またね～」

七海「また」

ぼえみ「またね～」

俺たちは校門で坂を折り始めた。

ふあみ先輩「ヘルプ！！ヘルプ！！ヘルプ-----
-----！」

時折、ふあみ先輩の声が聞こえた。

春風のプロローグ？（後書き）

・次回予告

？？「春は出会いの季節。それは彼も例外ではない。

次回『桜色リズム？』

風が彼の頬を撫でた。」

桜色リズム？（前書き）

メインヒロインの登場です。

桜色リズム？

「すーはー」

息を吸うと温かい春の伊吹が私の体を満たす。

「よしー！」

私はドアを開けた。

4月8日（金）

悟「つて訳でここのがからずのずの基本形と意味と活用系を答える
城島」

京矢「ひらがなのが行のう段です。意味はすぐに濁点を付けたもので
活用系はずー やずー、 ずずずずーーなどがあります」

悟「さてと、園原。このバカを一年のクラスに転入させる準備は出
来てるな」

七海「はい。さつき貰つてきました」

京矢「ノ

ンーー！」

伊吹「何やつてるんだか」

学校生活2日目。現在は4時間目で達神先生の古文だ。

しかし、古文なんて何の役に立つんだ？昔ある人が言つてたぜ。

『昔のことを氣にしていては前には進めない。前に向かつて手を伸ばし必死にもがけ』

ふあみ先輩が古文の追試の時に教師に啖呵を切つていた時の言葉だ。

しかし、暇だな。比較的に席が近い京矢と七海は達神先生と遊んでる。舞は少し離れた席で後ろ姿しか見えない女の子と話してる。なんか親しげだな。ぽえみは寝てるし・・・・・・・・・・あつ、俺も眠くなってきた・・・・・・・・

京矢「伊吹。忌々しい古文は終わつたぞ」

目を擦るといつの間にか達神先生はいなくなつていた。

舞「伊吹くん。今日は何処で食べる？教室？食堂？それとも屋上？」

伊吹「今日は・・・」

田をそらしてみるとぼえみが七海に起しそれでいる。

伊吹「屋上に行こうぜ。今日は天気もよさそうだしな」

京矢「じゃあ場所取りに行こうぜ」

伊吹「ああ」

七海「私たちもすぐ行くから」

ぼえみ「うひゅー」

ぼえみは半覚醒状態で挨拶した。

舞「そうだ伊吹くん」

教室を出ようとしたら時舞に呼び止められた。

伊吹「どうした？」

舞「他の友達も連れて言って紹介したいんだけどいいかな」

伊吹「もちろん。でも、一緒に来ればいいんじゃないかな？」

舞「その子、悟ちゃんに頼まれて副教材を資料室に運んでるから」

伊吹「んじゃ、また後でな」

俺は先に屋上に向かつた京矢を追いかけた。

~~~~~

屋上に着くとすでに京矢がシートを敷き、奇妙な踊りを踊っていた。

伊吹「シートのことを失念してた。用意がいいな」

京矢「そうだろ」

氣のまわる奴だ。

京矢「しかし、屋上は人が少ないな」

伊吹「仕方ないだろ」

この学園での食事場所は大まかに教室、学食に分けられる。しかし、極小の奴らは自分のお気に入りの場所で食べる。それが俺たちの屋上だ。

伊吹「みんな遅いな」

そう考えていると屋上の扉が開いた。

ぽえみ「やつと着いた」「

七海「正しくは私に引きずられたの間違いじゃない?」

京矢「ほえみ～七海～こつちだ！～」

七海「今行く」

七海がぽえみの手を引いてシートに座った。

「風が氣持い」

七海「ホントね」

そう詫えぽりに思ひ元々ほえみの寝スボットだつたな。

七海一ねえ？伊吹くん。舞ちゃんは

伊吹一舞なら・・・

備が言いかげたときパン!!!(アガル)アガ開いた

舞  
-  
は  
あ  
・  
・  
は  
あ  
・  
・  
は  
あ  
・  
・  
・  
お  
待  
た  
せ  
み  
ん  
な  
」

飛び出してきた舞は息を切らしていた。

伊吹一 紹介したい子って言うのは？」

舞「そ」に「るよ」

と舞は階段の方を指差した。

舞「出できて！！」

? ? 「はい」

出てきたのは長い黒髪とリボンが目を引く女の子。

咲美「花咲咲美です。よろしくお願いします」

まるで桜のような女の子だった。

## 桜色リズム？（後書き）

・次回予告

？？「新しい少女を迎へ、始まつた新しい時間。

次回『桜色リズム？』

彼女の新しい友達

感想お待ちしています。

桜色リズム？（前書き）

感想お願いします。

## 桜色リズム？

4月8日（金）

京矢「それでは血口紹介タイム！…ドンドン…パフパフ…」

ぼえみ「ぱふ～ぱふ～」

京矢がいつも以上に盛り上げている。

伊吹「京矢。別に合コンのノリでやるなとは言わないから少しは落ち着いてくれ。花咲さんが戸惑ってるだろ？」

花咲さんは戸惑っているのか舞の顔と京矢の顔を交互に見ている。

七海「花咲さん。座つて」

桜美「ふあ、はい！」

花咲さんは七海と舞の間に座つた。

京矢「じゃあ、血口紹介！…つてもな…」

舞「ね？」

自己紹介も始めずに2人の間で会話が成立してゐる。

ぼえみ「みんな～同じクラスだもんね～」

伊吹「うえー？」

俺は急に衝撃の事実を言われて変な声を出しちゃった。

舞「もしかして、知らなかつたの？」

伊吹「はい・・・・・」

京矢「そう～うといお前の悪いことだと想ひついで

伊吹「はい・・・・・」

まったく言葉が返せなかつた。

舞「じゃあ、クラスメイトのことなんてどうでもいいと想つてゐる  
伊吹くんに自己紹介をしてあげて」

「う・・・泣きたいよ・・・

桜美「花咲桜美です。去年は2年でした」

舞「私の隣の席で、2人で話してたら仲良くなつたんだ！」

思い返すと・・・・・いたよつの気がする。

伊吹「いたな！」

ベシーー！

伊吹「痛ツーー！」

七海に頭を叩かれる。

七海「デリカシーがない子はポイですよ」

伊吹「ポイーー？」

七海「冗談ですよ」

背筋が凍る冗談だ・・・・

咲美「私友達が少ないので・・・・」

花咲さんが頭を下げる。

桜美「よければ私と友達になつてください」

伊吹・ぽえみ「嫌だ」

舞・七海・京矢・桜美「ーー？」

舞と七海と京矢は俺とぽえみを畳然として見ており、花咲さんは表情を強張らせていた。

伊吹「俺たち変なこと言つたか？」

舞「言つたかつて……」

舞と七海がいつにもなく表情を暗くさせた。

伊吹「だつてな」

ぽえみ「ね~」

おやじく同じことを考えてるぽえみと田を合わせた。

京矢「そつ言つ」とか・・・」

京矢も気づいたらしい。

桜美「・・・・・」

無言で俯いている花咲さんに俺たちは告げた。

伊吹「花咲さん」

桜美「はい・・・・」

伊吹「俺たち、そういうじゃないと思つんだ」

桜美「えつ・・・・」

ぽえみ「友達のなり方~」

桜美「友達のなり方・・・?」

伊吹「こつこしてみんなで話してるだけで俺たちもう友達だろ？そんなこと言わなくたっていいんだよ」

ぽえみ「うん」

俺たちの気持ちを伝えると花咲さんは泣いていた。

伊吹「ちゅうー…ビューチー…みんなどうしよ」「みんなどうしよ

舞「あ～あ。女の子を泣かせちゃった」

七海「お仕置きですね。ふ、ふ、ふ

京矢「ふふふ、ハハハハ！」

京矢は笑うことにすら堪えられていなかつた。

ぽえみ「伊吹くん～女の子を～泣かせちゃ～ダメだよ～」

伊吹「ちゅー…ぽえみも共犯だろ…！」

桜美「う・・・・・」

伊吹「ああーー！」めんなさい

桜美「う・・・・・う・・・・・違つんです。嬉しいんです。こんなこと言われたの久しぶりだから・・・・・」

その言葉を聞いて安堵した。

伊吹「改めてよろしくな。花咲さん」

伊吹「はい」

この日俺たちに新しい友達が出来た。

## 桜色リズム？（後書き）

・次回予告

？？「あるとこに喫茶店があった。

そこでは男たちが会合を開いていたのだった。

次回『男たちの六場』

いつたいこれは何だ？」

## 男たちの穴場（前書き）

女の方もおしゃべり出ます。

## 男たちの六場

4月9日（土）

？？「合コンがしたい」

伊吹「やればいいじゃないですか？一人で」

？？「ぬおー？お前それでも男か！？ジョントルマンたるものまず合コンだろー！」

伊吹「俺の知ってるジョントルマンは合コンなんてしませんが」

？？「ジエネレーションギャップか」

伊吹「俺とあんたは世代どうりか住んでる世界が違うと思つ」

？？「なんだよ～。女の子といチャイチャズポズボしようぜ兄弟」

伊吹「兄弟って歳じゃないだろ40代」

？？「俺の心はいつまでも10代なのー！」

この髪面人こそ俺のバイト先の店長『綾崎安男』。この喫茶店『El amor es probable』のマスターだ。基本は面倒見のいいおっさんなのが変態だ。

伊吹「しかし、暇ですね・・・」

安男「そうだな。伊吹を弄るのも飽きたしな」

伊吹「そう言つことは本人の前で言わないでください」

安男「でも、お前の言つとももつともだ。まったく純情女子高生でもこないもんか」

伊吹「そんなこと一言も言つてません。それに来るわけないでしょう」

このお店には客の入りやすい時間帯がある。しかし、今の時間学生が入つてくることはほとんどない。例外と言つたら何となくバイトに入る京矢やノリで来るふあみ先輩か、七海が部活の助つ人で朝早くから出掛けっていて昼過ぎまで寝ていたぼえみくらいだ。

安男「高校生」「高校生」

カラソコロン!!!

安男「高校生!？」

ドアを開けて入つて来たのは。

京矢「呼びました?」

制服の京矢と

かもめ「マスター。またあれですか」

「この喫茶店の正職員『木原かもめ』さん（年齢不詳）だ。

安男「な、なんだ。京矢とかもめくんか」

京矢「な、なんだと何ですかマスター」

京矢は口をとんがらせる。

安男「すまん、すまん。冗談だ。しかし、2人とも今日はシフト入つてなかつたはずだが・・・」

京矢「俺は飯食いに来たんすよ。生徒会の仕事が長引いて、飯のこと考えてたらそういうや今日は伊吹がシフト入つてるなと思ってきたんだ」

伊吹「そんだけで来たのかよ。でも、何で仕事が長引いたんだ?」

京矢「実はふあみ先輩が『地デジ的な塔に行つてくる』って逃げて・  
・・」

俺は店内にあるテレビの電源をリモコンで付ける。

『この電波はこのふあ（ピッ）』

安男「ははは！ふあみの讓ちゃんも相変わらずだな」

伊吹「今からあれを迎えて行く如月さんが氣の毒だな

俺はどこにいるかも分からない如月さんに心の中で敬礼をした。

安男「で、かもめくんはどうしたんだ？」

かもめ「私は家にいても暇だなのでお手伝いに来ちゃいました」

安男「それはありがたい。ヒ、言いたいところだが正直仕事がないんだよな」

伊吹「だから暇だったんですよ」

かもめ「そうですか」

京矢「取りあえず、注文聞いてくれ」

しうがなく俺は注文を聞くことにした。

伊吹「ご注文は何でしうか？（営業スマイル）」

京矢「女の子をくれ

伊吹「分かりました（笑・・・・・）」

俺は窓の外に京矢を放り出した。

京矢「俺が悪かったよ」

かもめ「伊吹くん入れてあげようよ」

伊吹「そうですね」

しうがなく俺はドアの前に立つと、

安男「待て。まだ開けるんじゃない」

伊吹「なんですか？マスター？」

安男「ここで京矢を入れてやるのは簡単だ。しかし、ここで入れてしまえば……」

伊吹「ここで入れたら……？」

安男「面白くないだろ」

伊吹「さすがマスター……！」

かもめ「入れてあげましょ……」

安男「こんな男だけの職場だ。これ以上男が増えてたまるか。と、言つ訳でかもめくん。お友達の女の子を連れてきなさい。合図をしよう」

伊吹「まだ諦めてなかつた！？」

ここは喫茶店『E』 amore probable。ここでは4人の男子と1人の美女があなたの来店をお待ちしております。

かもめ「それじゃあ・・・・・」

伊吹「今日も仕事頑張りますか」

安男「よろしく頼むぞ」

京矢「俺も中に入れで！！」

## 男たちの六場（後書き）

- ・次回予告

？？「晴れて彼らの仲間になつた彼女。  
彼女は彼らをどう見ているのか？  
次回『彼女からの視点』  
彼女からはどう見えているのか？』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0324y/>

恋愛模様 共通編

2011年11月17日17時37分発行